

## 世界遺産アカデミー認定講師 File No.38

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当てて、お話を伺います。第38回目は、自治体職員として発掘調査や文化財保護を担当し、退職後も普及活動に係わっている賛助会員の樋口 秀信(ひぐち・ひでのぶ)さんです。今回は、樋口さんに世界遺産登録に従事した際のエピソードや、これからの認定講師としての在り方などについて、語っていただきました。

### ——世界遺産との出逢い

私と世界遺産との“出逢い”は、2010年(平成22年)の春にまで遡ります。当時、地方自治体の教育委員会に在籍していた私は、異動初日に「今日からあなたが世界遺産担当だから。よろしく」、「え?」という短いやりとりの後、「九州・山口の近代化産業遺産群(当初の名称)」の世界遺産登録推進を担当することになりました。近代化産業遺産群は8県11市にまたがるシリアルノミネーションのため、当初の活動は関係自治体間のコンセンサスを得ることに重点を置いた緩やかなものでした。しかし、推薦候補の本命だった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産(当初の名称)」を飛び越えての推薦決定によって状況は一変し、各自治体は、推薦書提出まで



端島(軍艦島)の高層集合住宅と地獄段

の短期間に、それぞれが抱える課題(例えば史跡指定など)の解決を迫られました。また

イコモス調査の際には、調査員の嗜好までも考慮した、綿密な対応プランの作成が求められました。説明は資産価値よりも保全管理に重点を置き、年次計画と予算措置には必ず触れること。保全上の問題点を指摘された場合は、現状と原因について既に把握していることを明言し、問題解決に向けた取り組みを時系列で説明すること等々。しかし万全の備えで臨んでも、登録を勝ち取れるかどうかは誰にも判りません。こうした世界遺産制度の在り方が、それまで予定調和で業務をこなしていた私には、返って新鮮で魅力的でした。「オススメの世界遺産は?」と聞かれることがありますが、その時には「〇〇で、面白いのはその登録推薦書(dossier)です」と答えています。ユネスコのホームページはさながら完備された資料室で、閲覧可能

な登録推薦書から、それぞれの遺産が抱える問題や顕著な普遍的価値を証明するための様々な工夫について学ぶことができます。『アンティグアの海軍造船所と関連考古遺跡群』などの考古遺跡群は、廃棄された状態で土地や水中に埋没しているため、「完全性」の証明は困難ですが、どのような方法で証明しているのか、興味が尽きません。実見が難しい場合でも、このように様々な方法で情報を得られることが、世界遺産の魅力のひとつです。

世界遺産を巡る体験は、多彩なインスピレーションを与えてくれます。ギリシャでオフシーズンに2週間ヒッチハイクし、雪の降る夜、クレタ島の山道で凍死の恐怖に震えたり、アラブ首長国連邦で「アル・アインの文化的遺跡群」を訪れた後、砂漠での発掘調査

中に出土した人骨が、実は他殺死体で、殺人及び死体遺棄事件に発展したり、『カイロの歴史地区』での調査中、エジプト人グループから投石されたり(思い出すのはこんなことばかり……)。それでも、折々に感じた独特な雰囲気は、今でも鮮やかに蘇ります。世界遺産を学ぶには、なんといっても三現(現場、現物、現実)主義ですね。

世界遺産登録に係わったこともあって「近代化遺産」に魅かれています。多くの近代化遺産が土地利用の改変や都市の再開発などで消滅の危機に瀕していますが、その一方で鉄道駅舎や橋梁、道路構造物など、産業や交通システムといった都市基盤の一部として、現在も役割を果たし続けているものもあります。近代化遺産は、その場所で暮らした人たちの営み、生業(なりわい)と深く関



今も調査が続く近代化遺産、三重津海軍所跡

わっており、智慧と努力の結晶と云えるものです。それら近代化遺産を、まず文化財として保護し、その上で観光資源として活用することで、地域の新たな魅力と文化の創造が可能になります。群馬県桐生(きりゅう)市は、



熊本は近代化遺産の宝庫&アニメの聖地  
(銅像は「ワンピース」のルフィ像)

「近代化遺産拠点都市」を宣言し、近代化遺産を文化財と地域資源の両面から捉え、観光によるまちづくりを進めています。また熊本県人吉(ひとよし)市では、明治末期に建造されたJR九州肥薩(ひさつ)線の人吉駅や大畑(おごば)駅が、人気アニメ「夏目友人帳

(なつめ・ゆうじんちょう)」への登場を契機に“アニメの聖地”として認知され、観光客の呼び込みに一役買っています。今後、このような官民協同の取り組みが進み、近代化遺産の保護のための施策が一層強固になることを期待しています。

### ——認定講師として考える 世界遺産検定の 将来について

ガイダンスを担当し、世界遺産検定が社会に果たす役割について考える機会が増えました。最近では、ユネスコの理念の実現と世界遺産制度との係わりに重点を置いて説明するよう心掛けています。「文化の多様性の保護及び相互理解」が、争いや差別を無くすための有効な方法であることには誰もか

首肯しますが、では、人類の過去の過ちや信仰に基づく確信的な破壊行為についても、相互理解のために容認できるか、と問われると、頭と心は違った答えを出そうとします。このような問いかけを通し、世界遺産は理想と現実の微妙なバランスの上に成り立っており、世界が抱える様々な問題を内包していることを、ガイダンスを通して理解してもらえればと思います。将来、企業、大学、政府・地方自治体が連携し、人材育成に係る取り組みを集約・展開できれば、世界遺産を通じてSDGs(持続可能な開発目標)にも貢献できる新ビジネスの創出も可能になるのではないかと期待が大きく膨らみます。その時、世界遺産検定がそのツールのひとつとして、また、文化支援の面でも社会に貢献できるよう、さらに一歩踏み込んだガイダンスを行っていきたいと思っています。